

平成22年度 農林総合研究センター課題内部評価結果 (事後評価)

- 1 評価実施組織 農林水産技術会議農林部会
 2 評価方法 農林水産部所管試験研究評価実施要領に準じる
 3 評価の経過 各専門部会で協議し、農林水産技術推進会議農林部会に報告・承認
 4 評価区分 事後評価
 5 総合評価 「計画以上の成果が得られた」、「計画どおりの成果が得られた」、「計画に近い成果が得られた」、「成果が得られなかった」の4区分
 「成果が得られなかった」と評価された課題は「所見・指摘事項等」と「指摘事項等に対する対応」を記載
 6 評価結果 下記の通り

課題 No.	研究課題名	研究 期間	研究の概要	総合評価
1	水田における土地利用型作物の高品質・安定生産技術の確立	H16～H21	水稲の生育状況及び気象状況等を把握することにより、冷害等の気象災害回避及び高品質米生産のための技術確立に資することを目的とする。毎年同一の栽培管理を行って気象要因と水稲の生育、収量との関係を明らかにすることにより、異常気象時における技術情報作成や指導資料作成に寄与できる。	計画以上の成果が得られた
	水稲の良食味・高品質米の安定生産技術の確立			
	水稲作柄安定対策調査圃試験			
2	水田における土地利用型作物の高品質・安定生産技術の確立	H18～H21	これまでの乳苗育成法の改善に取り組み、ハウス内に平置きした苗箱を上面から加温して出芽させて苗を育成する新しい乳苗育成法を開発した。この方法は、慣行の乳苗育成法に比べて苗箱移動回数を削減でき、また、従来の稚苗育成法に比べて育成期間と苗箱数の大幅な削減が図れることから、移植栽培で規模拡大を図ろうとする経営体を支援することができる。	計画に近い成果が得られた
	経営に応じた水稲の低コスト生産技術の確立			
	保温マットを利用した省力的な乳苗育苗の開発			
3	施設野菜の高品質・高生産性技術の確立	H19～H21	千葉県のとまと生産は全国第4位で重要な品目の一つである。しかし近年、生産コストの増大などから収益性が低下しており、一層の増収技術が強く求められている。多収生産技術として期待されている養液栽培とまとの低段密植栽培において、4段階摘心栽培における特性を明らかにした。4果房の着果率の低下や過繁茂などが問題となることが分かった。また、量管理法を適用することで過繁茂を解決できることも分かった。	計画どおりの成果が得られた
	とまとの栽培法			
	施設の高度利用による養液栽培とまとの多収栽培			

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
4	施設野菜の高品質・高生産性技術の確立 トマトの栽培法 (トマト新品種「ちばさんさん」の栽培法の確立)	H20～H21	新品種「ちばさんさん」のより迅速な普及・定着を図るため、半促成栽培において果実サイズ(1果当たり30g前後)を維持しつつ高糖度(7以上)を実現するための育苗方法や整枝法について試験を行った。その結果、果房直下の側枝を4葉残して摘心する整枝法は、収量や1果重は対照区並で、糖度は上位果房で高い傾向がみられたことから、半促成栽培で有効な整枝法と考えられた。	計画どおりの成果が得られた
5	施設野菜の高品質・高生産性技術の確立 キュウリの栽培法 促成キュウリのつる下ろし栽培における温湿度管理	H19～H21	軒高の低いハウスにおける促成キュウリつる下ろし栽培に適する室内環境制御法を確立するために、栽培試験を行ったところ、炭酸ガスを低濃度施用する場合の温度管理法は、病障害の発生が少ない新昼温管理法が適した。また、加温を終了した3月下旬以降、夜間に少量換気を行うことによって除湿され、褐斑病の発病が抑制できるので、生産を安定させる技術として有効と考えられた。	計画どおりの成果が得られた
6	施設野菜の高品質・高生産性技術の確立 イチゴの栽培法 花芽分化苗の品質保持を可能とする出荷調製及び活着促進技術の確立 高温時輸送苗の荷着後の品質及び果実生産性の評価	H20～H23 早期完了	北海道イチゴリー苗は花芽形成が遅く年内収量がほとんど期待できない。また、高温時に輸送されるためムレ苗が発生する危険性が高い。そこで、花芽形成を誘導できる簡便な技術、ムレ苗を防止できる技術の確立を目的に試験を行った。その結果、遮根シート埋設・堀上処理、予冷処理、籾殻輸送及び高濃度りん酸葉面処理の各処理は実用的ではなく、確実に花芽分化させるには短日処理する必要があることが判明した。	計画どおりの成果が得られた
7	野菜の高品質・高生産性技術の確立 九十九里海岸地帯の適作物・作型の開発 ネギ平床栽培技術の確立 秋冬ネギの平床栽培技術の確立	H19～H21	ネギの稚苗を溝定植する慣行栽培では、高温や降雨等による湿害や病害等で欠株が発生し、問題となっている。そこで、本県でネギ作付けの多い砂質土壌において、湿害を受けにくい平床に大苗を定植する平床栽培技術の確立を図った。大苗を用いた平床栽培は高温、乾燥、多かん水といったストレスに対して強く、欠株も慣行栽培に比べて少なかった。また、適した栽植密度を現在普及している品種ごとに明らかにした。	計画どおりの成果が得られた
8	野菜の高品質・高生産性技術の確立 九十九里海岸地帯の適作物・作型の開発 半促成栽培における全期間完熟果どりピーマン収穫の栽培管理法	H19～H21	近年、海匝地域のピーマンは完熟果の産地として評価されており、収穫期間を通した完熟果の安定出荷が求められている。しかし、現地慣行品種「京鈴」(タキイ種苗)では完熟果のみの収穫は草勢が衰え、栽培期間を通じた安定的な収量確保が困難である。そこで、「京鈴」を用いた全期間完熟果のみを収穫する専用栽培法の確立を目的として試験を行い、収穫期間を通した完熟果どりの栽培法として主枝2本仕立て栽培が適した。	計画どおりの成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
9	野菜の高品質・高生産性技術の確立 東総野菜研究室地域における特産野菜の生産安定技術の確立 長期連作圃場に適応する秀品・大果メロンの生産技術	H19～H21	長期連作条件に適応した露地メロンの栽培方法を確立し、秀品・大果生産を目指している生産者を技術面から支援するため、栽植方法、整枝・着果方法の改善による1果単価や所得を向上させる方法を明らかにした。ハウス半促成栽培では株間75cm子づる2本23節2果どりが、トンネル栽培では株間60cm子づる2本23節2果どりが最も良かった。遊びづるは果実の肥大を促進したが、ネットの盛り上がり、果皮色が劣った。	計画どおりの成果が得られた
10	野菜の高品質・高生産性技術の確立 暖地特産野菜の良質生産安定技術の確立 観光・直売用夏どり「TLタカミ」メロンの簡易栽培法の確立	H20～H22 早期完了	「TLタカミ」を立体栽培し、播種期（4～6月）と着果方法（1株1果どり、2果どり、4果どり）を変え、観光・直売用の高糖度の果実生産と作期の拡大を検討した。4月上旬播種では1株1果または2果の着果で大果・高糖度の果実が得られたが、5月及び6月上旬播種では果実品質が劣った。	計画どおりの成果が得られた
11	野菜の高品質・高生産性技術の確立 暖地特産野菜の良質生産安定技術の確立 ハウス半促成栽培における遮光資材利用によるサヤインゲンの品質向上技術の確立	H20～H23 早期完了	サヤインゲンのハウス半促成栽培において遮光率の異なる遮光資材のハウス内気温低下効果及び増収効果を調査した。その結果、遮光資材による気温低下効果は低く、また半つるの性品種に対する増収効果も低いことが明らかとなった。しかし、矮性品種に対しては増収効果が認められたので、観光プロの課題の中で継続検討する。	計画に近い成果が得られた
12	落葉果樹の高品質・安定生産技術の確立 ニホンナシ改植技術の特性解明と改善 ニホンナシ改植技術の特性解明と改善	H17～H21	ニホンナシを対象に、改植技術の特性解明を行った。その結果、ニホンナシでは、いや地現象が発生することや品種によって発生程度に差があることが明らかになった。その対策として客土が有効であった。また、大苗の定植時に点滴灌水やマルチ処理を行うことで、初期生育が良好になった。開発された改植技術が普及することにより、改植が促進され、生産者の経営の安定と産地における生産が振興される。	計画どおりの成果が得られた
13	常緑果樹の高品質・安定生産技術の確立 施設栽培技術の確立 種子なしピワ品種「希房」の栽培技術の確立 施設における栽培技術の確立	H17～H21	種子なしピワ「希房」は栽培特性がまだ十分に明らかにされておらず、栽培技術が確立されていない。そこで、産地への円滑な導入を図るために、施設における栽培実証を行った。施設栽培では露地栽培より樹の生育が良く、初期収量、果実品質が良好であった。また植物成長調整剤処理も天候に左右されずに実施できるため、施設栽培の有利性が明らかになった。	計画に近い成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
14	花植木の安定生産技術の確立 切り花類の作型と安定生産技術の確立 キンギョソウの落花メカニズムの解明と防止対策	H19～H21	キンギョソウは受粉によりエチレン生成が誘導されて落花しやすくなることが判明した。しかし、この現象は品種間差が大きく、受粉してもエチレン生成が少ない品種では、ほとんど落花しないことが明らかとなった。落花防止対策として、落花しにくい品種を導入すること、訪花昆虫の侵入を防止すること、収穫直後のエチレン作用抑制剤入り品質保持剤処理が効果的であることが判明した。	計画に近い成果が得られた
15	花植木の安定生産技術の確立 切り花類の作型と安定生産技術の確立 草花類における育苗方法の改良による新作型の開発	H19～H21	ストック、トルコギキョウ等の草花類で低コストで需要の多い時期に安定して出荷できる育苗方法と作型開発を検討した。固化培地を用いた育苗で、根を傷めず定植可能であることが判明した。トルコギキョウでは慣行培地と比較して需要の多い7月～10月に安定した出荷が可能となり、新しい作型を開発した。	計画に近い成果が得られた
16	花植木の安定生産技術の確立 切り花類の作型と安定生産技術の確立 カーネーションの年内出荷の品質向上技術	H20～H23 早期完了	スプレーカーネーションの「起き上がり仕立て」栽培における年内出荷分の品質向上を検討したが、本栽培法では夏期の高温による品質低下が著しい上に病害虫の被害が大きく、十分な年内収量を確保することは難しいことが明らかとなったことから、本課題を早期完了とする。	成果が得られなかった
<p>【所見・指摘事項等】 本技術により種苗費削減効果は期待されるが、病害虫防除と年内収量の確保が、現状の研究成果だけでは難しいことから、研究成果の達成度は低いと判断される。従って生産現場への普及性は低い。</p> <p>【指摘事項等に対する対応】 生産現場の問題点に基づいて新技術を検討したところ、収量の確保が難しいことに加えて、新たな病害虫の発生が問題となり、所期の目的を達成できないことが判明したため、1年早く完了する判断を下した。新たな病害虫の発生は技術情報として生産現場で活用する。</p>				
17	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 新発生病害虫の発生生態の解明と防除技術の開発 ナシ炭疽病の発生生態の解明と防除対策	H19～H21	ナシ炭疽病の防除のため、ナシ炭疽病の第一次伝染源、発生時期、発病の品種間差異、薬剤の防除効果等を明らかにし、これらを基に本病の防除対策を防除指針に反映させた。	計画以上の成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
18	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 新発生病害虫の発生生態の解明と防除技術の開発 トマト退緑萎縮病の発生生態と防除技術の確立	H20～H22 早期完了	平成19年に国内2例目として発生した本病は、世界的にも発生が少なく生態に不明な点が多かった。そこで本病の収量への影響、伝染方法、器具消毒方法等について調査した。その結果、本病は収量、品質への影響が大きく注意を要する病害であること、汁液伝染の他にクロマルハナバチにより伝搬される可能性があること、次亜塩素酸ナトリウム溶液による器具消毒効果が高いこと等の基本的知見が得られ、防除の留意点が明らかになった。	計画以上の成果が得られた
19	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 難防除病害虫の発生生態の解明と防除技術の開発 トルコギキョウ・スターチスを加害するアザミウマ類とその媒介ウイルス病の総合防除対策	H18～H21	トルコギキョウやスターチス等、多品目の花きが周年栽培されている産地で問題化したウイルス病の蔓延要因を解明し、防除対策を確立した。当産地では春期にはアイスランドポピー、夏期にはトルコギキョウ、秋期には採種用トルコギキョウが媒介アザミウマ類の発生源となっていることが判明した。蔓延終息にはトルコギキョウ採種栽培の回避が必要であること、また殺虫剤及び防虫ネットの効果を明らかにした。	計画どおりの成果が得られた
20	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 難防除病害虫の発生生態の解明と防除技術の開発 ビワを加害するカメムシ類の発生生態と防除	H19～H21	ビワを加害する果樹カメムシ類の防除対策を確立する。スギ雄花量等の年次変動を根拠とした翌年のチャバネアオカメムシ発生量の早期予察法を開発した。また、被害軽減効果のある二重果実袋を開発するとともに、殺虫剤による防除体系を確立した。これらの技術により、予想される果樹カメムシの発生量に応じた適確な防除を実施することが可能となった。	計画どおりの成果が得られた
21	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 トマト黄化葉巻病の防除対策 トマト黄化葉巻病の発生生態の解明と防除対策	H19～H21	本県における発生生態を明らかにし、県内トマト産地の実情に見合った防除指針を提示することを目的として、発生状況調査、伝染源調査、抵抗性品種の抵抗性確認、発病株除去の防除効果を調査した。その結果、本県では7～10月にかけて本病の発生が多くなり防除が必要であること、発生初期の発病株除去は防除効果が高いこと等を示した。また診断体制を整え、本病の早期防除、現地での病徴認知に貢献した。	計画以上の成果が得られた
22	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 トマト黄化葉巻病の防除対策 タバココナジラミの生態解明とその防除対策	H19～H21	トマト黄化葉巻ウイルスの媒介昆虫であるタバココナジラミの生態及び県内に発生するタバココナジラミ個体群の薬剤に対する感受性を明らかにし、物理的、化学的及び生物的防除法等の有効な防除手段を組み合わせた総合防除技術を確立した。本研究の結果、タバココナジラミの生態及び防除対策が広く認知され、本種とトマト黄化葉巻病による壊滅的被害を受ける農家が減少し、安定生産に寄与した。	計画以上の成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
23	高品質生産をめざした病害虫管理技術の確立 トマト黄化葉巻病の防除対策 被覆資材を利用したトマト黄化葉巻病の物理的、耕種的防除法の確立	H19～H21	トマト黄化葉巻病の物理的、耕種的防除法を確立するため試験を行った。ハウス開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを展張することで、コナジラミ類に対する高い侵入防止効果が認められた。さらに、遮光率35%の遮光資材を屋根に展張することで、ハウス内の気温上昇が抑制され上物収量が増加した。抵抗性品種では「アニモTY-12」「TYまもる」が有望であった。	計画以上の成果が得られた
24	農林作物の野生鳥獣被害軽減化技術の開発 獣類の農作物被害軽減対策の検討 獣類の食害を回避・低減させる作物の検索	H19～H21	野生鳥獣による農林作物被害が県南地域で急増し、被害は水稻、野菜類、果樹、タケノコ、造林木の広範囲に及び、その対策が求められている。獣類の食性は個体差や地域差、慣れによる差があるなど、被害軽減対策を検討するうえでは、獣類の食性を知ることは重要である。そこで、鳥獣害に関する各種資料及びホームページから、イノシシ、サル、シカの食性や作物の嗜好性に関する情報を収集した。	計画どおりの成果が得られた
25	農林作物の野生鳥獣被害軽減化技術の開発 獣類の農作物被害軽減対策の検討 効率的なイノシシ捕獲技術の検証	H19～H21	イノシシの農作物被害軽減対策として最も有効な手段はイノシシの捕獲である。そこで、効率的な捕獲を進めるため、箱わなに赤外線暗視カメラを取り付け、出没するイノシシの行動を記録、解析を試みた。幼獣は警戒心が弱く、箱わなを警戒することなく捕獲が可能であったが、成獣は警戒心が強く、箱わなに入らないことが観察された。現状の方法による箱わなの捕獲率は低いことが明らかとなった。	計画に近い成果が得られた
26	農林作物の野生鳥獣被害軽減化技術の開発 獣類の農作物被害軽減対策の検討 獣類の食害を回避・低減させる作物の植栽効果の検証	H19～H21	イノシシが嗜好的に嫌う作物としてシソとトウガラシをサツマイモの外周に植栽し、イノシシ食害の被害低減効果を明らかにした。シソはイノシシの食害を回避、低減させることが明らかとなったが、シソが落葉し始めると被害が発生したことから、シソの落葉が始まる以前の10月中に、サツマイモの収穫を終了させることが必要と考えられる。また、シソは目隠し効果も大きいことも影響したものと思われた。	計画どおりの成果が得られた
27	農林作物の野生鳥獣被害軽減化技術の開発 森林・林業に対する獣類被害実態の解明と被害軽減化技術の検討 森林・林業に対する獣類被害実態の解明と被害軽減化技術の検討	H18～H21	獣類による森林・林業の被害は県中南部で大きな問題となっている。そこで、イノシシによるタケノコ被害の対策として簡易電気柵と竹防護柵の防護効果を検証した結果、低コストで防護効果の高いことが明らかになった。また、シカによる造林地被害の対策として、食害が少ない樹種を明らかにした。この成果により、低コストな防護対策の実施が可能となり、森林整備やタケノコの安定生産に貢献することが期待される。	計画どおりの成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
28	特用林産物の安定生産の確立 きのか栽培におけるキノコバエの被害防除技術の確立 原木シイタケの害虫フタモントンボキノコバエの生態の解明と防除技術の開発	H17～H21	平成15年に被害が確認されたフタモントンボキノコバエは、収穫適期の子実体を高い割合で被害するので、経営に与える影響が非常に大きいと考えられるうえ、被害地域の拡大も懸念されるので、被害の実態と生態の解明及び防除法の確立が求められている。被害実態調査から11月～12月に被害が大きく、また成虫の発生はシイタケ子実体が発生する12月から翌年1月まで認められたことから、規格外シイタケ子実体をほだ場に放置せず、適切に処理すれば多発時期の発生源を抑え、被害軽減につながる事が明らかとなった。	計画どおりの成果が得られた
29	特用林産物の安定生産の確立 きのか栽培におけるキノコバエの被害防除技術の確立 菌床きのかのキノコバエ類の被害防止技術の確立	H17～H21	菌床シイタケ栽培施設では、害虫が発生し効率的な生産の妨げとなっている。千葉県で多い栽培形態である簡易、周年栽培施設でのナガマドキノコバエ成虫は6月～10月に多く発生し、また成虫が夕方から明方にかけて活動する様子が確認されたため、その時間帯での成虫の侵入を防止することが重要と考えられた。クロバネキノコバエについては、改良した捕虫器の捕殺能力が約1.4倍優れていることが確認された。これらの結果から、子実体被害の防止と出荷時の幼虫付着を確認する作業の軽減効果が期待できる。	計画に近い成果が得られた
30	畑作園芸研究室物の新品種育成と導入・選定 畑作園芸研究室物の優良系統の選定・選抜及び育成 親いも利用型サトイモ品種の育成	H19～H21	良食味で中華料理・東南アジア料理やスイーツなどの新規用途に向き、形状が良い親いも利用型サトイモ新品種の育成に取り組んだ結果、「千葉3号」を育成した。「千葉3号」は、親いも形状が「筍芋」に類似し、1個900g程度、肉質は粉質で、かすかな甘みと独特の風味を持ち、いも内部が紫色に着色する。いもの色や食感などからスイーツやフライドポテト、中華(台湾)料理への利用が期待される。	計画どおりの成果が得られた
31	野菜の新品種育成と導入・選定 メロンの新品種育成 地床アールスメロンの新品種育成	H20～H22 中止	千葉県産ブランドのメロン新品種を育成することで、県内のメロン生産者に活気と収益増をもたらすことが期待されたが、メロン市場価格の低迷と生産コストの上昇により、本県の地床アールスメロン栽培面積は減少傾向にある。また、民間でも育種が行われており、今後県オリジナルの品種育成を行っても大きな普及効果は期待できないと考えられることから本課題を中止課題とする。	計画に近い成果が得られた
32	花植木の新品種育成と導入・選定 鉢花類の新品種育成及び導入・選定 ベゴニア類の新品種育成	H19～H21	本県のベゴニア生産現場では種苗費が高いことなどから、独自の品種開発の要望があり、これまでに「コーラルファンタジー」他2品種を育成したが、さらに新色系統が望まれていた。そこで花色変異株から「プリンセスファンタジー」を育成したところ、生産者の評価も高かったため、品種登録出願し、現地栽培試験も行っている。今後、許諾契約を結び、生産が開始すれば既存の3品種合計年間8万鉢の生産が10～12万鉢へと増加することが見込める。	計画に近い成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
33	環境にやさしい養液栽培技術の開発 養液栽培廃液浄化の実証 石灰硫黄系脱窒材を用いた養液栽培廃液浄化施設の実用化	H19～H21	本県の養液栽培面積は全国1位の348haであり、環境保全型農業の進展に伴い養液栽培においても環境負荷の低減が望まれている。大型養液栽培施設に対応できる石灰硫黄系脱窒材を用いた廃水浄化施設を作成し、浄化能力を検証したところ、廃液に含まれる硝酸態窒素の60.3%が浄化され、浄化施設の「水温」と「日負荷量」から「日浄化量」を予測することができた。	計画どおりの成果が得られた
34	無農薬による校庭等の芝草総合管理技術の開発 害虫・雑草防除技術の開発 乳化病菌を用いたコガネムシ類防除剤の開発	H20～H22 早期完了	乳化病菌を用いた芝草用コガネムシ類幼虫防除剤を開発するため、人工培養胞子のうを用いた製剤の選抜、安定した防除効果を得るための処理方法を検討した。その結果、水和剤を芝面に灌水処理したとき最も防除効果が高いことがわかった。しかし、共同開発を進めていた農薬メーカーが登録を断念したことから、本成果をもって一旦研究を完了させる。新たな協力企業が見つかり次第、再度課題化し農薬登録を目指す。	計画に近い成果が得られた
35	バイオマス資源の活用技術の確立 ナシ剪定枝の資源化技術の開発 ナシ剪定枝の発生量を削減する栽培技術の確立	H17～H21	新梢摘心によるナシ剪定枝量削減技術を現地実証した。その結果、「新高」及び「あきづき」において、摘心処理による抑制効果が確認された。また、「豊水」についても、改良した2芽を残さない摘心処理による抑制効果が確認された。摘心処理による剪定枝量の削減効果が明らかになったことで、生産現場では剪定時間や剪定枝の処分量を削減できる。	計画に近い成果が得られた
36	バイオマス資源の活用技術の確立 ナシ剪定枝の資源化技術の開発 ナシ剪定枝資源化物の白紋羽病に対する安全性の評価	H18～H21	未熟な有機物の施用はナシの重要土壌病害である白紋羽病を助長する懸念があり、ナシ剪定枝資堆肥の利用を図る上で支障になっている。このため、堆肥化過程の各ナシ剪定枝混合土壌における白紋羽病菌の動態等の調査結果から、ナシ剪定枝は堆肥化により白紋羽病を助長する可能性は少なくなり、安全性が高くなることを明らかにした。	計画どおりの成果が得られた
37	千葉県農業構造分析と地域営農システムの構築 水田農業経営体の成立要因の解明 出資型農業生産法人を中心とした農協の担い手確保対策に関する研究	H19～H21	農協出資法人の課題を抽出して地域特性に応じた法人類型を提案するために、既存の農協出資法人の調査を行い、運営上の課題等を整理した他、文献・資料などから全国の情勢を調査した。調査の結果から、県内の「農協直営型」の農協出資法人は農業経営事業のみでは経営収支が厳しく、収益部門の確保等の対策が必要であると考えられた。また、全国では様々な形の農協出資法人が設立されており、更なる類型化の検討が必要である。	計画に近い成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
38	農業生産環境の維持管理技術の確立 農業生産環境維持保全のための調査及び対策 野菜のカドミウム含量の実態把握とカドミウム吸収に及ぼす土壌要因の解明	H19～H21	野菜及び畑作物のカドミウム吸収の実態、その品種間差及びカドミウム吸収に及ぼす土壌要因の影響を明らかにする。ホウレンソウとラッカセイは、カドミウムのリスクが高かった。ホウレンソウでは、低吸収品種が選別され、カドミウムを3割以上低減できる。土壌の1M酢安抽出カドミウム含量が高いほど、ホウレンソウの含量が高い傾向があった。しかし、この値からリスクが高い地域の選別することは困難であった。	計画に近い成果が得られた
39	競争条件の変化に対応した農産物マーケティング・システムの構築 農産物マーケティング・システムの構築 営農・経済事業を中心とした農協の販売戦略モデルに関する研究	H19～H21	農協販売事業の新たな戦略構築に資するため、先進優良事例（農協、農業法人等）の内容の分析を行い、「農業経営体支援」「川上・川下のコーディネート」「直売所からの展開」及び「地域内での共生」の4つの戦略要素モデルを導き、戦略推進に必要な条件を整理した。	計画に近い成果が得られた
40	競争条件の変化に対応した農産物マーケティング・システムの構築 農産物マーケティング・システムの構築 産地等の農産物認証制度への認識及び対応行動に関する研究	H19～H21	「ちばエコ農産物」等の県認証制度の運用改善を図るため、各県農産物認証制度の特徴の整理や有機農業実践農家の実態解明を行い、消費者に理解されやすい認証制度の体系化が認証制度改善に向けた課題であることを解明した。	計画に近い成果が得られた
41	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 坊主しらずネギ栽培実証試験	H20～H21	坊主しらずネギ栽培において、「ちばエコ農産物」の栽培基準に従い「足長美人」を用いて実証試験を行った結果、場内及び現地試験とも県内の標準的な収量が得られ、「ちばエコ農産物」の栽培基準を達成できた。この実証により認定農家が安定的に栽培に取り組めるとともに、新規参入者の増加が期待される。	計画どおりの成果が得られた
42	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 カボチャ・トンネル栽培実証試験	H21	カボチャ・トンネル栽培において、有機質肥料の施用、化学合成農薬に含めない農薬や育苗時の防虫ネットを使用して栽培を行ったところ、慣行栽培に比べ、定植時のアブラムシ類が少なく、うどんこ病の初発が遅くなった。収量は慣行栽培程度であった。これらの技術の導入によって、「ちばエコ農産物」栽培基準を満たした栽培が可能であることが実証された。	計画どおりの成果が得られた

課題 No.	研究課題名 大課題 中課題 小課題 細目課題	研究 期間	研究の概要	総合評価
43	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 半促成ピーマン栽培実証試験	H20～H21	本県のピーマン栽培面積は97haであるが「ちばエコ農産物」としての認証面積は小さく、拡大が求められている。そこで、半促成（長期）作型のピーマン栽培において、「ちばエコ農産物」の栽培基準に従って実証試験を行った。実証区の化学肥料使用窒素成分量は有機質を主体とした肥料とすることで18.7kg/10a、化学合成農薬使用成分回数も17回と栽培基準以下であり、「ちばエコ」栽培基準での栽培が可能であった。	計画どおりの成果が得られた
44	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 メロン・半促成栽培実証試験	H21	メロン半促成栽培において、「ちばエコ」栽培基準（化学合成農薬使用回数15回以下、化学肥料使用量窒素成分量7.0kg/10a以下）に従い、以下のような技術の実践により標準的な収量及び果実品質が確保できた。基肥に有機質肥料を含む肥料を用いた。殺虫剤は、化学合成農薬に含めない農薬や効果の高い農薬を用いた。殺菌剤は、化学合成農薬に含めない農薬を中心に定期的に散布した。	計画どおりの成果が得られた
45	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 ブロッコリー・秋冬どり栽培実証試験	H21	ブロッコリー秋冬どり栽培において、「ちばエコ」栽培基準（化学合成農薬使用回数6回以下、化学肥料使用量窒素成分量14.5kg/10a以下）に従い、以下のような技術の実践により標準的な収量が確保できた。牛ふん堆肥の施用で土づくりを行い、基肥に有機質肥料を含む肥料を用いた。殺虫剤は、化学合成農薬に含めない農薬や効果の高い農薬を用いた。殺菌剤は、化学合成農薬に含めない農薬を中心に定期的に散布した。	計画どおりの成果が得られた
46	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 オクラ栽培実証試験	H21	オクラ「ちばエコ農産物」の栽培を現地に普及するためちばエコ基準の栽培試験を場内及び現地で行ったところ、慣行栽培と同等の生育、収量を得られることが実証された。	計画どおりの成果が得られた
47	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 促成イチゴ栽培実証試験	H20～H21	促成イチゴ栽培において「ちばエコ農産物」の栽培基準に従い、場内及び現地（山武市）実証試験を行った。その結果、基肥に有機質肥料を用い、耐病性品種の利用や化学合成農薬に含めない農薬の使用、適期防除により病害虫の発生を抑え、慣行並みの収量を得られることを実証した。	計画どおりの成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
48	「ちばエコ農業」推進実証試験 「ちばエコ農業」栽培基準適応性試験 イチジク栽培実証試験	H21	イチジク栽培において、「ちばエコ農産物」栽培基準に従い、病虫害の発生消長及び生育・収量への影響を明らかにする。調査圃場では、「ちばエコ農産物」栽培基準を達成するとともに、果実収量、品質も特に問題は認められなかった。	計画に近い成果が得られた
49	農産物の高品質流通加工管理技術の開発 切り花の流通システムの確立 切り花の鮮度保持技術の確立	H19～H21	ガーベラ切り花において、前処理時に抗菌剤を利用することで、抗菌剤を連続処理することと同等の花持ち延長効果が見られた。ストック切り花において、観賞期間中の抗菌剤の連続処理が、花持ち延長に有効であった。湿地性カラー切り花において、前処理時に品質保持剤を使用することにより、切り口の裂開を防止することができたが、花持ち延長効果は認められなかった。	計画に近い成果が得られた
50	森林環境の保全及び森林の活用技術の開発 竹林拡大過程の解明と対策の検討 竹林拡大過程の解明と対策の検討	H19～H21	県内各地で竹林拡大が大きな問題となっているため、過去の空中写真と現地調査から竹林の拡大過程を明らかにした。また、竹林を適正な森林に戻すため、効率的な伐竹方法、伐竹後の管理方法を明らかにした。この成果により、竹林拡大対策の実施が可能となり、県内の森林が適正に整備され、多面的機能の効果的な発揮が期待される。	計画どおりの成果が得られた
51	観光農業に対応した生産技術の開発 エキゾチックプランツの導入と栽培技術の確立 観賞用エキゾチックプランツの栽培と利用技術の開発	H19～H21	南房総地域の観光農業に適した、熱帯・亜熱帯原産で園芸的な価値があるエキゾチックプランツの導入を検討した。その結果、無加温で栽培でき、枝物として高単価で取引される新しいエキゾチックプランツとしてポインセチアの切り枝栽培が有望と判断された。	計画に近い成果が得られた
52	観光農業に対応した生産技術の開発 観光・直売所に適するくだもの品種選定と栽培・加工技術の確立 観光・直売に適するイチジクの品種選定と栽培・加工技術の確立 消費者の評価に基づく品種選定と地域適応性	H18～H21	イチジクの観光・直売に適した品種の選定と、さし木による苗木の自家育成法の確立を目指した。品種選定については直売所で消費者を対象として行った食味アンケート調査結果と、試験圃場で収穫した果実の調査結果から、「バナネ」等の4品種を選定した。苗木育成法については適切な穂木の準備方法、さし木時期、マルチ資材、施肥量等を明らかにし、さし木による自家育成方法を確立した。	計画どおりの成果が得られた

課題 No.	研究課題名	研究期間	研究の概要	総合評価
53	観光農業に対応した生産技術の開発 観光・直売所に適するくだもの品種選定と栽培・加工技術の確立 観光・直売に適するイチジク品種の栽培技術の確立	H18～H21	イチジクの生育は土壌条件により大きく異なるため、粘質土と黒ボク土において消費者ニーズに対応したイチジク優良品種の栽培技術を確立する。粘質土では幼木時に弱めに剪定しても早期に主枝が長くなり、結果枝本数が増えることで収穫量を確保できたが、黒ボク土では剪定強度による幼木時の生育や収量差はなかった。黒マルチや稲わらマルチでの畦上部被覆は生育が良好になった。	計画どおりの成果が得られた
54	森林療法に効果的な森づくり技術の開発 森林療法に効果的な森づくりの方向性の検討 森林療法に効果的な森づくりの方向性の検討	H17～H21	森林療法に効果的な森づくりの方向性を明らかにするため、県民の森等で効果的な森づくりの実践を試みセラピーコースを設置した。また、健康と癒しの森30選の選定箇所について、セラピー効果を検証した。さらに、(独)森林総合研究所と共同で、常緑針葉樹林と落葉広葉樹林等タイプの異なる森林における生理的・心理的効果を明らかにした。得られた成果により、本県の里山の特徴を活かした森林療法プログラムや森づくりの推進が期待される。	計画どおりの成果が得られた